



# HARLAOWN REPORT

—ハラオウン レポート—



HARLAOWN REPORT

HARLAOWN REPORT

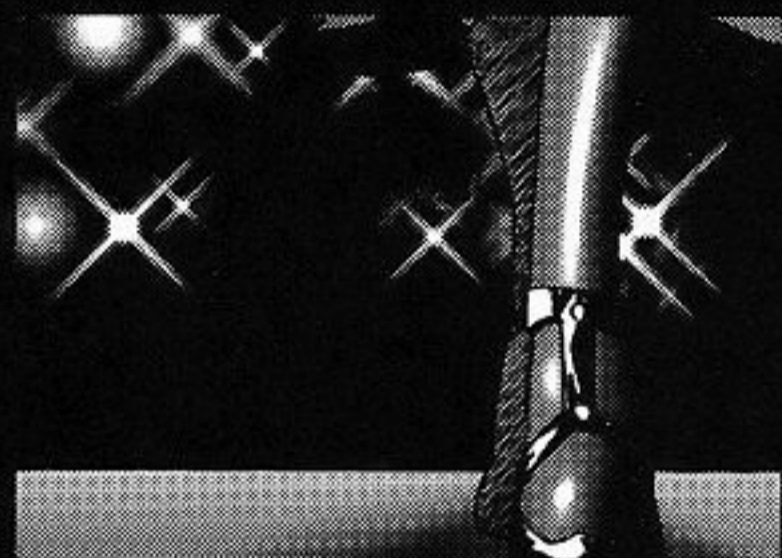


# INDEX

HARLAOWN REPORT ..... 3

Scribble ..... 23





# HARLAOWN REPORT



45ACP



午後9時 海鳴海浜公園

「早いですね」

背後から声をかけると、彼女の肩が一瞬ビクンと跳ね上がった。

「あ……」

振り返ったその顔に浮かんでいるのは驚き——ではない。

「約束の時間までまだ20分もありますよ？」

「……性分です…」

言い放ちながらも、応える彼女の視線はわずかに逸れ、片方の腕をつかむ手に力が入っているのがわかる。

それは「来るべきときが来た」という覚悟と、かろうじて保っている理性が命じる「淑女」としての「仮面」だ。

「性分、ですか。僕はてっきり期待に胸を躍らせて急いできたものだと思ってましたよ」

「な……っ?!」

言い返そうとして、果たせずうつむく彼女の姿は、その心情を雄弁に物語っていた。

(予想どおりだ)

「それじゃあ、早速始めましょうか。この前の「お願い」、覚えてますよね？ちゃんとアレ、してきていますか？」



「すばらしい、よく似合っていますよ」

飾りの無い、正直な物言いをしたつもりだったが、彼女はわずかにうつむき、羞恥に耐えるように目をつむって無言だった。

コートの中身は、普段の彼女を知る者ならば想像だにできないものだろう。管理局の制服に覆い隠されていたその肢体は今は外気にまったく無防備なまま、衣類としての用を成さないPVC製のボンテージのみで私の目の前に在った。

「……命令、というからこの通りにしてきました。そうでなければ……」

絞り出すようにつぶやく彼女——リンディ・ハラウン提督の声は震えていた。寒さ……だけではない。白磁のような柔肌にほんのり灯った朱色が、それを表している。

「たしかに、屋外でのプレイは始めてですね。どうですか、普段生活している場で調教を受ける気分は？」

「……」


答えない。それは予想していたが、こちらに気づかれないように、しかしせわしなく動く視線には新鮮な驚きを覚えた。どうやら周囲への警戒のあまり、こちらへの注意が疎かになっているらしい。

——すばらしい。言葉に警戒と威嚇を塗りこみ自分の姿勢を崩そうとしない彼女だが、その内面に隠しているものが手に取るように解るのだ。

コートの中身がさらけ出しているのは、その裸身だけではない、ということか。

「ふむ……」

もし、この裸身を外界と隔てている唯一の障壁——コートを剥ぎ取ったとき、そこには彼女の“何”が隠されているのだろうか……？



「あっ?!」  
抵抗されると思っていたが、意外なほどあっけなくコートは彼女の体から奪い取ることが出来た。

ボンテージ衣装のみになった彼女はそれでもせめて出来る限りの肌の露出を隠そうとその場にうずくまった。先にもまして周囲に向ける視線の速度は速くなり、まるで小動物のように震えている。

「おや、変ですね。抵抗するかと思ったら、まるで自分から脱いだようにも見えますよ?」

私の言葉に、彼女は一瞬肩を震わせ、動かなくなった。無意識のうちに出してしまった「M奴隷」としての反応を思い出し、愕然としているのだろう。

実際、彼女は私が肩に手をかけた瞬間、まるで自分から脱がしやすくなるように腕を上げて私が袖を引っ張る動作にあわせるようにクルリと一回転したのだった。出来の悪い時代劇のようなリズムで……

「あ……そ、それは……」


「まあそれはこれからじっくりと教えてもらいましょう。さあ、始めましょうか。このために来たんですから」

振り返った彼女は私は片方の手に持っているものを見て一瞬息を呑んだ。

「そ、そんな……ここで……?!」

そう、ここで始めるのだ。愛しいM奴隷リンディの、調教開始の合図「縄化粧」を——。

# HARLAOWN REPORT



ギュッ…ギチッ……シュツ……  
「あ…ほう……」  
縄が擦れて音を立てるたびに硬く閉じていた唇が緩み、か細い声が漏れた。形の整った瞳が小刻みに揺れ、いつしかその端には滴が生まれていた。  
(早速出来上がってきたな)  
いわゆる「縄酔い」が彼女の体を支配していた。本人はおそらく無意識だが、体が自然にこちらが縄をかけやすいように姿勢を整えてくる。  
「あう…、いんっ！」  
不意に手首からの縄尻を引き上げてみると、美しい管楽器のような響きがあがった。苦痛であげたものとはとても思えない。  
一瞬の後、自分のあげた声に自身で驚いた彼女の目に理性の光が戻った……かに見えたが、首から胸元へ走る縄の締め付けをゆるめると再び体から力が抜けて行くのが縄の感触からも解った。

——数分後、リンディ元提督は高手小手に縛り上げられ、縄化粧が完成した。



中指で乳首をそっとなでると、意外な感触があった。「おや、今日はいつもより硬くなってますね？」

「や…そんなの…」

確かめるようにもう一度先端に指を乗せる。

「あ…」

そのまま押し込むと、乳首よりのその周囲の乳輪から先に沈みこみ始めた。その動きにあわせるように、彼女の口から漏れ出る音色が大きくなっていく。

「ああ…は…んああ…」

「やっぱりだ。カチコチですよ、リンディさんの乳首」

答える暇を与えず、すばやく指を移して突起の上下から絞り上げる。

「ひあっ！あああああっ！！」

不意に訪れた痛みに、構えてなかった彼女は思わず

「いつも」の時のように大きな悲鳴を上げてしまった。

「おやおや、そんなに大声をだしてもいいんですが？」

夜の公園は意外と遠くまで声が響くんですよ？」

「！…くうっ…」

一瞬我に返り、続く痛みに唇をかんで耐えるリンディ。やはり調教というのはこうでなくては行けない。

最初から従順というのでは、興覚めというものだ。

彼女が「やむを得ず体を許している貞淑な母親」という仮面を保とうとしているのなら、主人として存分に

ささやかな努力を汲んで、理性を保ったままの調教を

続けるべきだろう。

「リンディさん、これを見てください。この  
つをどう思いますか？」  
頬に自分の分身を近づけると、リンディ  
はその社の匂いに思わず顔を向けた。  
「ひっ……！」  
「ひどいなあ、いつも見慣れてるじゃない  
ですか？」  
苦笑交じりに言うと、彼女の目に再び  
仮面としての“理性”が戻った。  
「く……っ……み、見慣れていても、見たく  
ないものというのはありますっ」  
それは理解できる。だがそれは仮面が言  
わせて居ることだ。奥底の本性が発露す  
る場面を幾度と見ているが、その時のリン  
ディは、まったく正反対の目で同じものを  
見つめる。  
言った後で思い出したのだから、彼女は  
一瞬ばかりの悪い表情を浮かべ、視線をそら  
してつぶやいた。  
「そっですか、それは残念」  
私はあえて彼女の隙に付け込まなかつ  
た。それは三社からゆっくりと、肉体と一  
緒に追いついていけばいい。  
「それじゃあ先に二社が見慣れているもの  
から笑いごとしましょうか」



「はっ……あ…」

公園の外灯に背中を預けさせて、ボンテージショーツの中に指を潜り込ませる。しっとりとした陰毛中を掻き分けると、その奥にある秘唇の輪郭を、私は指の先端が触れるか触れないかの微妙な距離を保ちつつなぞった。

「あん！」

リンディの体が小さくのけぞる。そのせいで腰が前に押し出され、結果として秘唇に私の指先がより深く潜り込むことになった。

「ああっ！ひっ…んんう！」

「おや、もっと指が欲しいですか？焦らないでくださいリンディさん」

「な…っ、ち、ちg…ああっ！」

それ以上言えないように、潜り込んだ指をそのまま上にずらす。爪の先が触れたのはクリトリスだったのだろう。リンディはまた大きくのけぞった。そのまま呼吸が一瞬止まり、顔は天を仰いだまま小さく喘ぎがもれていた。

その状態が数秒続いた後、指先に別の感触が割り込んできた。それまでの湿度とは異質の質感。なるほど、これは――

「もう濡れてきましたね」

「！！」

指をとおして、彼女の動揺が伝わってくる。理性の仮面では隠し隠せない、体の反応が知られたのだ。いずれわかることでも、こんな、何処で誰が見ているかもわからない場所で、こんな恥も外聞も無い姿で、こんなにも速く体がMとして順応するとは重いもしなかったのだろう。

「いい反応ですよリンディさん」


彼女は無言だった。それが答えだった。

「ふくっ……んむっ…」

——移動中の車内。  
路面の段差やコーナリングの度に後部座席でくっついた声が出る。安全運転を心がけながらサッとバックミラーに目をやると、リアウインドウの下端にかかるように、縄で一纏めにされているリンディの形の良い脚が見えた。  
「リンディさん、聞こえますか？もうすぐ、大きな段差がありますから……ほら」

ガクンッ

「ふうあっ!？」  
突然下から突き上げられ、彼女の体が一瞬浮いた。その浮遊感と恐怖から、一際大きな悲鳴(ボールギャグで埋まっているが)が出る。  
「どうしました？このくらいで音をあげたら後がもちませんよ？  
……もうすぐ未舗装路に入りますから」  
その言葉は、彼女にどう受け止められただろう？目隠しと絨口具で表情は見え、瞬間的に強張った肩から推測するしかない。  
この砂利道をすぎれば今夜の目的地に到着する。その時になれば解るだろう……



数十分後、私とリンディの姿は山奥でひっそり経営しているラブホテルの一室にあった。「SMルーム」と看板のかかったその部屋には磔台・木馬・滑車……ありとあらゆる調教道具が整備されていた。

「どうですか？ コレだけの設備をもった部屋は、海鳴市には他にありませんよ」

「あ……す、すご……い……」

私の説明などまるで頭に入っていないとでも言うように、彼女の視線は部屋の設備を行ったりきたりで落ち着きが無い。抱いた肩に力を入れると、ようやく気づいたようだ。

「あ……」

これから自分の汗と悲鳴を吸うことになるだろう数々の淫具をどこか名残惜しそうに流し見やめながらリンディは私に向き直った。部屋に入る前までつけていた淑女の仮面はもはや表情の何処にもなく、今夜の自分の運命を不安と期待で思い浮かべる「Mとしての顔」だけがそこにあった。

「あ……ご主人様……。わ、私のいやらしい本性に、どうかふさわしい罰をお与えください……」

奴隷としての懇願に、慣れているはずなのに私の胸も高鳴る。そう、ここからは必死なのだ……。

「まずはさっきまでの反発的な態度に対する罰が必要ですね」

足場の台をはずすと、リシカの体は両膝と手首の3点で宙吊りになった。

「んあーひくあー…」

重心と配分を考えてなるべく負担を減らすように配慮はしたつもりだが、それでも女性の体格には辛い姿勢だ。

「あ…あ…ご主人様…た、大丈夫です…へ、平気…っ！」

言い終わらないうちにボンテージショーツに指がかかったのを敏感に感じ取った彼女の体は、不自由な姿勢にも関わらず左右にゆれる。しかしそれも無意味な抵抗で、数秒後にはボタンを外されたショーツは簡単に私の手の中に納まり、後には大股開きの脚に合わせて、心持ち開いた淫唇とその上で愛蜜を湛える緑の茂みだけが残った。

「自分からお仕置きをねだっておいてそれはないでしょう？この分も後でお仕置きですね」

「や…やんっ……」

さて、準備は終わった。目隠しも万全。あとは今夜の“執行人”の出番だ……

私は彼女に気づかれないようにそっと手をあげて合図した。

—チュブツ チャバツ  
「あっ！あんっ！やっ…ご、ご主人……  
様ア……」

“執行人”が秘部に舌を這わせると、リンディの体は電気ショックを与えられた患者のように空中でのけぞり、跳ね上がった。私も執行人も、彼女に位置関係を悟られないように一切答えない。代わりに執行人は舌の速度を速め、リンディの理性を揺さぶった。  
「ひっ！あ…ああっ！い、いいわ！いいのあ……」

—クチュツ ビチュツ チャブ……

「んあああっ！い、いいっ！！私のアソコ……ひぎいいっ！？」

とつぜん、執行人がリンディのクリトリスに歯を立てた。一気に跳ね上がった苦痛と快楽の高波に彼女の呼吸が瞬間的に止まったが、執行人の舌が下のリズムに戻るとゆっくりと息を吐いた。それは私からは執行人の怒りだとおかつたが、その存在に気づいていない彼女には曖昧な言い方をした自分への警告だと思えたようだ。

「は…はい、アソコ…ではありません…  
…お オマ○ゴです。リンディのおバサマ○ゴが、き、気持ちいいです……」  
……あ、ああっ！ま、いい、き、今日のご主人様、いつもよりは、激し…いインっ！！」

「残念ですが、実は今リンディさんにお仕置きしてるのは私じゃないんですよ」

「……っ！ふ、フェイト?!」  
 隠しを外され、目の前に広がった光景はリンディにとって衝撃的だった。彼女のもっとも恥ずかしい箇所を舌で責め立てていたのは、あろうことが彼女の義娘だったのだから。

フェイトは無言でじっとリンディを見上げていた。その視線は感情を押し殺した冷たいものだったが、その奥に隠し切れない「怒り」が見え隠れしていた。


「……どうして? どうしてあなたが…」  
 「それはね、リンディさんのせいなんです。」

私の言葉を、リンディは理解できていないようだった。言葉を続ける。「……こういうことです、実は先日、彼女が私を訪ねてきてたんですよ。私たちの関係を知ってね」

事実だった。どこでかぎつけたものか、フェイト女史は私をたずねてきて開回一番、二人の間柄を問いただしてきたのだ。







私は調教を録画したビデオを見せながら、正直に全てを告白した。二人が男女の仲…を遂かに逸脱した行為を録画していること、そしてそれがお互いの自発的な意思によって成り立っていることを聞き終えた彼女は一言「あなたはいまだ母を愛しているのですか?」とたずねた。

私の答えに、彼女は一定の理解を示さず、短くため息をついて「解りました」と答えた。

しかしその後の提案には私も驚いた。「あなたたちの関係は認めます。でもその代わりに、私の前でそれを証明してみてください」

その証明方法をたずねると、「私もあなたの調教を受けます」と返してきたのだ。

どうやら、彼女には彼女独自の考え方や基準があるらしい。私にはその真意はわからないが、認めなければこの事実を明るみにすると言ってきたのだから本気と認めざるを得ない。

かくして、私は二人目の奴隷、あるいは「共犯者」を得て、今回のリンディの調教プランを立てることになったのだ。

# HARLAOWN REPORT

「ああ、うん、ああああ……」  
「あの時、リンディの腕部と手首のハイブレイターを押し、そのリモコンスイッチをフェイトの緊縛した手の中に入れて、リンディさんに罰を与え、おかげでリンディは……」  
「フェイトはあの通り、ハイブの強弱をたくみに制御して、真相を白めている。初めてとは思えないほどだ。」  
「ふと、あの夜に疑問が浮かんだ。」

「君は若く、あのさういふ姿をどう思う？」  
「どう？」  
「彼女は自虐的な女性として優しい母親だ。だが同時に私の前に、淫靡な娼婦に等しい痴態を晒す奴隷でもある。」  
「この二つの顔はどっちが本物でどっちが偽者か、そういう形で分けることが出来るだろうか？」  
「！」

やはりそういうことか。フェイトは私たちの関係を知って、自分を育ててくれた母親としてのリンディが偽者だったのかもしれないと疑っていたのだ。  
「私が保証するのはおかしい話だが、どちらも真実のリンディ、ハラオウンだよ。」  
「そ、それは……わかっていませぬ……」  
でも……と続く言葉を呑んで、フェイトは押し黙ってしまった。責めの手は止まっていた。リンディも不安そうに私を見る。  
「なら、ここで証明してみせよう。」  
言うが早いか、私はフェイトを立たせて縄とボンテージを剥ぎ取った。  
「ちょっと手荒だが……彼女が押しかかっていた答えを見せるには、これが一番だろう。」



# HARLAOWN REPORT



ヒュンッ  
ヒチイイッ！！

「ぐっあああああっ！！」  
「フイトッ！！」  
風ざり音の一瞬後、フェイトの尻に鞭が猛烈な勢いで叩きつけられた。しかし、彼女よりもリンティの悲鳴の方が大きかったかもしれない。「お義母さんをハイブで責めるような子にはツレナリのお仕事さが必要だからね」  
「や、やめてください。ここはすべて私の責任です。悪いのは……」  
「それじゃああなたが代わりに鞭を受けますか？ だしがそれだけはNGなプレイでしたよね？」  
「う……」  
一瞬、ためらうリンティ。これは私が彼女を奴隷として受け入れたときからの約束事だった。それを受けた時点で、それはもうお互いにとってプレイではなく、ただの虐待へと成り下がる。しかしその夜も一瞬の事で、再び顔を上げた彼女の目に、涙粉れも無い、母の光があった。「……う、受けます。鞭も、痲痺も、どんな苦痛でも娘の代わりに私が受けます。だから、だから……」  
「……か、義母さん……」  
この人の愛情は本物だ。フェイトも、まぐわかった。た。た。ろ。う。

# HARLAOWN REPORT



私は二人を吊チェーンから開放すると、改めて  
前手の両手を縛り、向かい合わせに座ら  
せた。

「……ごめんなさい、フェイト。私は…」  
「お母さんのほうこそ、義母さんのこと信じ  
てあげなさい。」

「……二人は死の仲の良の母親に戻ったらし  
い。私としても、自分たちのことで彼女たちの家庭  
に不協和音を生み出すの覚悟がない。」

「あ、あの、ご主人様。」

ふと、リシディがこもも向き直った。

「何ですか？」

「さ、さっきの雅刑、改めて私が…その…」

「おんや、義母さんはただ…私なら、鞭は慣れ  
てますから。」

「やれやれ、律儀な三人だ。血はつながってなくて  
も親子たどいうことか。」

「…ん？今なんかざらりととんでもないことを  
聞いたような…？」

「…まあ、跡が残るのは私も好きではないです  
から強制はしませんが……。どうです、せっかく仲直  
りしたんだから、二人と一緒に、私に身を預けてみ  
ませんか？……二人とも、このままでは体がうず  
いて辛いでしょう？」

この提案にはさすがに双方とも目を丸くしたが  
じっと数秒見つめ合うと、躊躇いながらも揃って

「ご主人様の仰せのままに……」

と、頭を垂れて答えたのだ。まさかこうもすんな  
り受け入れられるとは思わなかったが、いまさら  
後にも引けない。

(やれやれ…、どうやら今夜は大変な一晚になりそ  
うだ……)



————— ヴイイイイイイイイ……

「んっ! あ……ああっ! ふ、フェイトおっ  
……! ?」  
「おんっ! アッ! や、やあ……か、義母さんっ  
ね、いっ!」  
お互いの秘唇をつなく双頭パイプの振動  
で、二人の喘声はまるでツラノの合唱の  
ようだった。  
「三人とも、このパイプと相性がいいみたい  
ですね。この調子じゃすぐにでもイキそう  
かな?」  
「はっ、いっ……い、イキそうです……うんっ!」  
「わ……私、も……義母さん、い、一緒に……」  
三人の答えが一致を見たので、私はパイプ  
のボリュームを一気に最大まで上げた。二  
人の体は跳ね上がるようにのけぞり、それ  
でも互いにパイプを啜えこんだまま離そう  
とはしなかった。  
「あっ! あっ……あああああ……」  
「ひぎっ! ひあ……あああ……ら、らめえ……  
い、イツちゃう……! わ、私、義母さんと……」  
「わ、私……も……ふ、フェイト……っ! 一緒に  
……逝きましょ……うんっ!!」  
振動のリズムに合わせて二人の息が荒く、  
しかし同調を始める。そろそろだ。これから  
続くであろう三人の新たな関係の、第一歩が  
はじまるのだ。  
私はそう感じながら、二人の愛しいメス奴  
隷を眺めていた。

# HARLAOWN REPORT

アッ! アアアアアアアアアアアッ!  
いくっいくっうううっ!!





ボンテージなウーノさん  
略して「ボンノウ」

最初、作業帽被った男の  
黒幕として登場する予定  
でしたが、なんか途中から  
あんま登場するタイミン  
グがわからなくて、そのま  
ま登場させそこねてしま  
いましたorz



街受画像

<http://45acp.sakura.ne.jp/3g/u-no.jpg>



## 最近ビビったこと

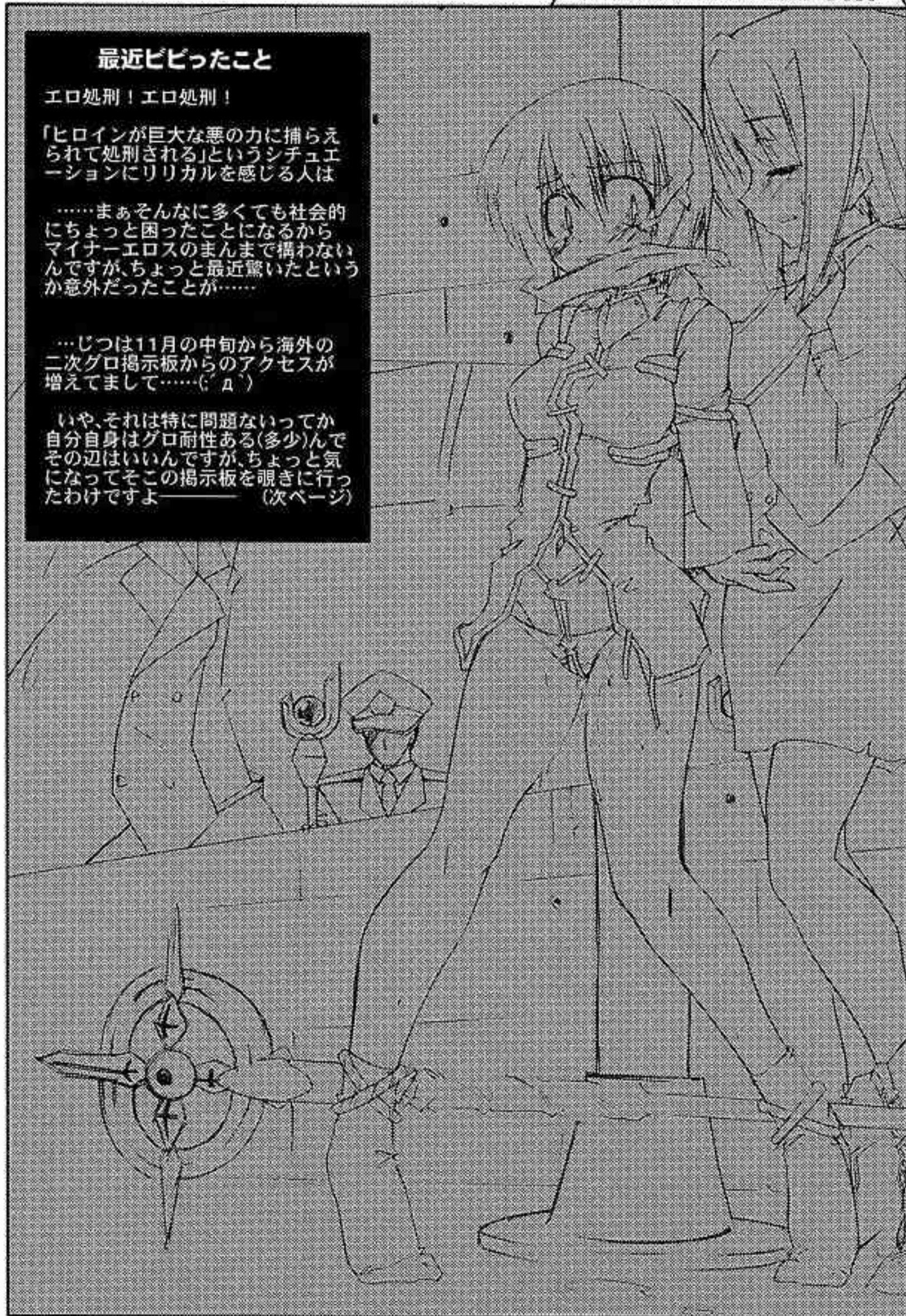
エロ処刑！エロ処刑！

「ヒロインが巨大な悪の力に捕らえられて処刑される」というシチュエーションにリリカルを感じる人は

……まあそんなに多くても社会的にちょっと困ったことになるからマイナーエロスのまんまで構わないんですが、ちょっと最近驚いたというか意外だったことが……

…じつは11月の中旬から海外の二次グロ掲示板からのアクセスが増えてまして……(´Д`)

いや、それは特に問題ないってか自分自身はグロ耐性ある(多少)んでその辺はいいんですが、ちょっと気になってそこの掲示板を覗きに行っただけですよ——(次ページ)





(続き)  
 ……で、ですね。その掲示板では概ね好意的に受け止められててその部分はちょっと嬉しかったわけなんですけど、その人たちの(当然、海の向こうの人々)が言うには……

「こいつ、HPに線画しか貼ってないから、きっとどっかに『処刑後』の絵があるに違いないZE！」

……ってことらしいんですね。

——なんか俺、ガチな虹黒絵描きだと認識されてRUUU！？

ていうかさすがにそっち行っちゃうとジャンル違ってくるんでちょっと……

あと、ああいうの描くのって実はかなり画力要求されるんですよ。技術的問題として、僕描けないです、ああいうの。

本誌に載せたいので、ぜひ読んでくれるのを祈ります。

なのはさんが愛娘を人質にとられて(裸+ニーソ)切腹を迫られるという内容の一枚  
 このあと、切腹寸前でフェイトさんの(鬼のような)奮戦で救い出されてキッキウツなので無害です。



## リンディ&フェイト 街受画像

……くれぐれも電車の中や公共の場では……

ここまで書いて気づいたんですが、とてもじゃないが人に見せられない街受画像を使うという事は、もしかしたら公共の場における携帯電話の使用マナーの向上に一役買うんではないでしょうか？(恥ずかしくて使えないという意味で)

どうなんですか教授？！

**「第五の力だよ！」**



街受画像

<http://45acp.sakura.ne.jp/3g/L-Fo.jpg>

# HARLAOWN REPORT



フェイトさん大ピンチ！

終盤戦で、トーレとセツテに  
敗れて「くやしい…でも！」な状況  
です。

ああ、こういう雰囲気で一  
本描くのもいいなあ…



街受画像

<http://45acp.sakura.ne.jp/3g/FTS.jpg>

# あとがき

こんにちわ、45ACPです。  
この度は「HARLAOWN REPORT」をお買い上げ頂き、有難うございます。

「夢オチを越えるくだらねー(コサキンのニュアンス)落とし方を模索する」というコンセプトで続けてきたこの「〇〇オチ」シリーズですが、ついに来るところまで来たというか、よく考えなくてもりりなのが好きな人間の中で一体何人が日高義樹のワシントンレポート見てるんだという部分でどアウトです。

ちなみに、2007年に発行した3冊はみんなこれ系オチでした。  
イエーイ頭わるーい俺！

これからも頭悪いなりにハラオウン家の面々をフィーチャーしつつ、妄想とボンテージとエロスとエロスとエロスを追い求めていこうと思っています。  
ていうか今回の、「母娘レズ調教で確かめ合う親子愛ってあるよね」という内容ですが、そんなのないよね。普通。

さて、実は私45ACPですが、来年2008年で同人活動開始10年目になります。  
……正確には、「物証はないけどたしか10年目」という状況です(お  
サークルとしてなにか特別なことをや……ってどうかなる位置づけのサー  
クルでもないの相変わらずなことを相変わらずにやるのみですが。

次のイベント参加は(おそらく)春のなのは系オンリーになります。どのような内容になるかはまだ未定ですが、久しぶりに本格的に漫画描きます。描くってば。

……ねえ、信じてorz

## 奥付

HARLAOWN REPORT

発行日 2007/12/31

発行者 45ACP

URL

<http://45acp.sakura.ne.jp/>

e-mail

[giro@45acp.sakura.ne.jp](mailto:giro@45acp.sakura.ne.jp)



Mobile QR

WARP CO Presents

HARLAOWN  
REPORT

FOR ADULT ONLY